

こくりにゅうだより



大阪府立桜塚高等学校3年 平井 葉月

「4月からまた新しい気持ちでスタートしていきたいと思います。」

多文化子育て支援ボランティア養成講座

5月10日(木)、17日(木)、24日(木) 10:00~12:00

内容:①外国人母子のための居場所づくり「おかまち・おやこでにほんご(於岡町図書館)」、
「せんり・おやこでにほんご(於千里図書館)」、「しょうない・おやこでにほんご(於庄内図書館)」

②多文化子ども保育「にこにこ」

のボランティアとして活動するために、出産や育児に不安を抱く外国人の現状などについて学ぶ。

対象:講座に全回出席し、修了後上記いずれかの活動にボランティアとして参加できる人。

①は小学生以下の子どもの母親／②は保育士資格がある人。

場所:とよなか国際交流センター

定員:各活動10人

参加費:1000円(全3回分)

申込:4月23日(月)9時から電話・来館受付。先着順。

一時保育:0歳(首が座っている乳児)～就学前、無料、要申込



2017年度 事業評価会を開催しました!!

2月24日（土）、センターにてとよなか国際交流協会の事業評価会を開催し、職員、ボランティア、協会役員など56人が参加しました。豊中市長の浅利様にもご参加いただき、ご挨拶をいただきました。

事業評価会は、当協会の約30の事業にかかわるボランティアがスタッフとともに1年間の活動についてそれぞれの活動を自己評価し、その内容を全体で共有し、次年度の事業計画につなげるために毎年開催されています。



参加した人からは、「たくさんの事業を知ることが出来てよかった」「協会の事業内容や（ほかの）グループの活動内容を知るには事業評価会に出席することはとても良い機会だと思う」「事業はそれぞれで活動しているが、すべてが繋がっている活動だと思った」「事業同士の連携が大切だと思った」などの感想が寄せられました。

評価会終了後は「ランチ交流会」でボランティア、スタッフ間の親交を深めました。参加した人たちの声を活かし、2018年度の事業もより一層充実させていきたいと思ひます。

コラム 「少しだけ北の国から@福島 ～震災と暮らしを考える～」

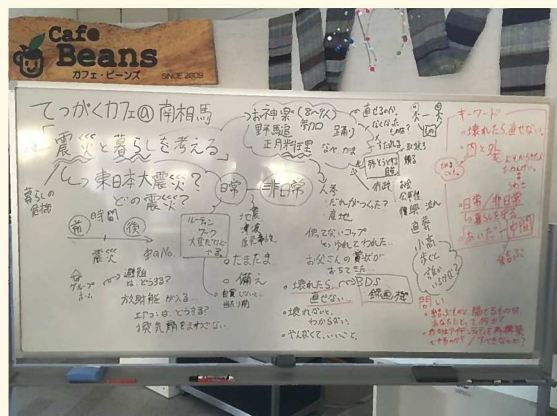
辻 明典

協会事業（哲学カフェ、プロジェクト“さんかふえ”等）に参加していた辻明典さんが、2013年度より故郷である福島県南相馬市に戻り、教員をしています。辻さんからの福島からの便りをどうぞ。

「生活はあるけれど、暮らしはない。」 南相馬市の図書館でひらいた哲学カフェで、現在の宙に浮いたような状況をこのように語ってくれた方がいました。原発事故によって避難する前は、職人として生業を立て、祭りの季節になれば町内で協力してお神楽を執り行い、正月になれば鍋釜を出して節の料理を作り、近所にお裾分けする。きっと小さな子どもの面倒を見ることが、看取りさえも、地域で協力して担ってきたのでしょ。

でも今は、コンビニの弁当ばかり食べている。料理のお裾分けをしていた町内の人たちも、今は遠くに避難してしまった。お神楽を再開するにしても、人手が足りなくて準備すらできない。みんなで面倒を見ていた子どもの声は、聴こえてこない。

「暮らし」は、ただ生きていることを指す言葉ではなさそうです。命の世話さえも、サービスに頼るのではなく協働で担う、そんな豊かな人間関係が何重にも編み込まれていた。それが「暮らし」だった。それを壊されてしまったら、再生は至難の業でしょう。では、どうすればいいのでしょうか。そんなことを、つい考えてしまいます。



コンビニ人間 (村田沙耶香著・文藝春秋)

普段あまり本を読まない私でも短編で難しくなく面白くて一気に読めた一冊。

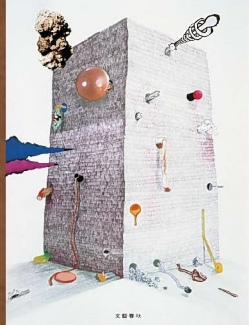
この小説に出てくる主人公の家族は変わり者の彼女を心配し、ごく普通の人生を歩むことを期待している。でも普通って、誰の？いつのまにか読んでる自分自身の問題として迫ってきて、心がザワつく。普通になることを「治る」と表現していて、「いつになったら治るの？いつまで我慢すればいいの？」と妹に迫られる場面がなんだか悲しかった。

世の中から求められる自分と本来のありのままの自分。こちら側とあちら側、どちらかが普通でどちらかがそうじゃない？上手に「人間」をするって難しいなあと思う。生き方とか幸せとは何なんだろう？主人公のある意味愚直な考え方は、共感できるものがあつた。辛い現実、隠したい自分、得意不得意。人生もっと楽に生きていけたらいいのになあ。

最後に自分を貫く決心をした彼女に拍手を送りたい。それにしても白羽さんはちょっと無理、クズ過ぎる。（協会職員・松原光与）

スタッフおすすめ図書

コンビニ人間 村田沙耶香



＼Youは何しに国流へ？／ 第7回 センターで活動している人を紹介します☆

私がこくりゅうと関わるようになったのは今から10年前です。当時小学4年生だった私は大阪に引っ越して来ました。担任の先生から私と同じように韓国朝鮮にルーツを持つ小・中学生が集まる『韓国・朝鮮ことばとあそびのつどい』のチラシをもらい母に連れられたことがきっかけでこくりゅうに毎月行くようになりました。

中高時代は少し間が空いてしまいましたが、大学生になってから、また声をかけていただき、子ども事業（「子ども母語」と「学習支援・サンプレイス」）のコーディネーターとしてまたこくりゅうに通うようになりました。私と同じように外国にルーツを持つ子どもたちがルーツのことを知ったり、言語を学んだり、

遊んだり、こくりゅうが居場所作りになるためのお手伝いをしています。

自分自身の体験として、小学生の時にこくりゅうと出会えたことは今の自分を支えてくれていることが多いです。外国人として周りのみんなと違うのは私だけじゃないんだ。って、こくりゅうでのいろんな人との出会いがそう気づかせてくれました。

こくりゅうを必要としている人は、見えないところにたくさんいると思います。私は一人でも多くの、特に子どもたちと繋がれるように、これからも活動を続けていきたいと考えています。大学生を卒業しても、こくりゅうは私の居場所でもあるので関わり続けたいです。



子どもサポート事業
コーディネーター
安 未紗さん
(写真中央)



3/3(土)フォトレポート 2017年度 市民ゼミナール

メディアリテラシー講座

～テレビの向こうの外国人～



毎年恒例のメディアリテラシー、今回はオリンピックに焦点をあてて2年後の東京オリンピックにむけたCMの分析や、ピョンチャンオリンピックの開幕式を報じるニュースの比較を行いました。番組によってミサイル問題や外交の問題もおり交ぜて報道しているニュースもあり、参加者からは「分析や比較をして、普段何気なく見ているだけでは気付かない製作者の意図が見えた」との感想をいただきました。

【セミナー報告】

居場所の可能性 -富山・ひとのまの実践に学ぶ-

2月26日（月）、講師に富山県でコミュニティハウスひとのま代表として活動されている宮田隼さんをお招きし、支援者向けセミナー「居場所の可能性—富山『ひとのま』の実践に学ぶ—」を開催しました。当日は豊中市周辺でさまざまな支援を行っている人を中心に35名の参加がありました。

宮田さん曰く「一軒家を開放しているだけ」という“ひとのま”には、毎日たくさんの方が訪れます。地域の子どもや若者、お年寄りなどなど、年齢も違えば状況や抱えているものも全く違う人たちが集まり、お話しをしたり料理をしたり遊んだり。もちろん、時にはぶつかったりすることも。活動の中で問題が起こったら大変、そういう声に宮田さんはこうおっしゃられます。「なんでトラブルが起きたらだめなの？」と。人がありのままで出会い、ぶつかることは自然なことで、ぶつかった後にどうやって折り合いをつけるかが重要です。その折り合いをつけるのは当人同士であって、宮田さんが間に入ることはあまりないそうです。そうすることで、ひとのまは自然とみんなが共存できる場になっているそうです。

“みんなが過ごしやすいように”という名の下で、様々なルールが増え、結果その場が不自由になってしまうという事は活動だけでなく社会全体に言えることだと思います。「優しさは間違いと排除につながるかもしれない」、宮田さんの言葉が、ひと月以上経った今でも頭の中に響いています。



登録グループの活動紹介



No.7 国際交流市民ネット豊中

——1992年設立の時点ですでに10団体、国際交流の活動をしている団体がいたということですか。

鶴川：TIFAは1985年。アムネスティが豊中に出来たのが1983年ぐらいですから、そこにESSや豊中市国際交流ボランティアの会、虹の会、大阪国際文化協会などが集まった形で市民ネットの前身の国際交流ネットワークとよなかで作られました。

——どうして国際交流ネットワークとよなかを作られたのですか。

鶴川：すでに活動していた国際交流の団体が国際交流センターを作ってほしいという要望をグループとして市に出したのが始まりです。その頃は市民団体と行政が共に国際交流をつくり上げる熱気に溢れた時代やったんです。

どうしてそれが市民ネットに変わったかという、国際交流センターが設立されて、当然ながら他にも国際交流の団体、協会事業で子どもメイトや豊中日本語ホストファミリーなどが作られました。それから、ネットワークに入らない市民グループも増えました。協会が盛んになっていくにつれて、こういう民間交流グループがたくさん出来たことで、従来の国際交流ネットワークとよなかだけではここに関わる市民が把握できなくなってきた。そこで、2000年にもう一度市民ネットという形で組み替えようということになりました。

ところが、みんなが望んだように市民ネットというくくりで、みんなが連携していきましようという形にはどうしてもなりにくいところがありました。国際交流センターの予算も削られて指定管理制度が導入されていく中で、協会も自分たちの事業を守らないといけないという姿勢が出てくるし、以前の国際交流センターを建設した時のような熱気がだんだん消えていくような感じがしました。今はそういう時代の流れと、この予算的な問題と、新しく市民の事業ボランティアの人が、なかなか市民ネットワークというくくりでは捉えにくくなってきたという印象です。

とよなか国際交流センターには、市民による自主的な国際交流活動を支援するための登録グループ制度があります。実際の活動内容や国際交流への思いを伺いました。

——ももとの市民ネットの活動としては、他のいろんな国際交流をやっている団体同士が一緒に何かを行うためのネットワーク組織だったということでしょうか。

鶴川：ネットワークを作ってセンターを盛り上げていこうというのがそもそもの動機です。過去には14回ほど、毎年ネットワーク祭りというのをやっていました。今は世界の動きや内外のNGOやNPOを知り、国際交流のための多様な学びの場をつくるという活動に絞りつつあります。もともと緩やかな活動なので、あんまりしゃかりきにならずにそれぞれの活動を進めながら、一緒にやれることはやりましょう、と考えています。入管手続きに関する相談ができる吉岡さんがメンバーにいらっしゃるの、実際に相談を受けたり、役に立つ情報を相談しに来た人に伝えたり、入管法について学習をする場を設けています。

——そういう場所があるというのが大事ですね。生活していく中での安心感につながると思います。知ってたら人にも伝えられますよね。

鶴川：職員の人ともっといろんな形で、世代も越えて緩やかにつながっていけばいいという気持ちです。もしも理不尽な状況に陥ったとしても、国際交流センターをなんとか保ちたい、助けたい。市民として大事な場所だと考えたい。だからこれからは防災の問題も一緒になって考えたいし、「市民の活動を活発にし、協会とともに日本人も外国人も住みたいまち豊中を目指す」というのは設立当初から変わらないですね。

【活動についての問い合わせ先】

国際交流市民ネット豊中

u_maki@mac.com（鶴川）

活動日時：毎月第4月曜日13:30～15:30

とよなか国際交流センターおしらせ

「こくりゅうだより」第108号(2018年4月号)

発行元・問い合わせ：(公財)とよなか国際交流協会

〒560-0026 大阪府豊中市玉井町1丁目1-1エトレ豊中6F

阪急宝塚線豊中駅すぐ

開館時間：9:00～21:30(貸室受付は20:00まで・水曜休館)

TEL:06-6843-4343 FAX:06-6843-4375

E-Mail:atoms@a.zaq.jp

WEB: <http://www.a-atoms.info/>



SNSも随時更新中！

「とよなか国際交流センター」で検索！

